八雲抄

宇治寒
哥也句を名ごそ

[EV.52]

PL788
.4
.G4
1654
vol. 52
copy 1
Asian
Japan
Case

カケ巳ノ 四一

2004551302

葉女四女ノ春より秋までを
うつこそは人ぐ（深き毎ノ
ある・物思（往古物思フ）の姫ぎみの
やうもれがそそ
使のくぐぞありまふ
人ぐをそうまぐ（毋ノ侭ノ羽）
さうをのるくよもんいぐそ
めれとうでめて
ひうるくて
ちれうぐうんいぐ
忘ぬうまは・物をあげ
あくそれいをあ

まごろまれ
あけや・こ
とりてまこ
なでぶうて
つこせ給
むくへなり
ありよべの
なくされ
などくいく
くりー行
だろへぐて
こちよー

ぞりけりづづこそとゝもとゝ
ゝとゝをゝてゝるゝ。ゝ。ずゝとゝいゝ
ゝ。ゝ風。つゝゝゝよゞのやうもいゝづゞく
ゝばゞーゝれゝ色ゝゝゝゝゝゝゝゝてゝるく
ゝゞゞてゝるゝず。ゝゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝれゝゝ。ゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝつゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ

さそそそれつひありうぞうちさ
そそれ文（旧仮）まえなぞぞ。いうろろぞぞもなへぐ。
ほ（下寸行）へのこここの紙（はく）ようちろ
それまこへもおつてまへぐぐまあありれぐぐつひ
紙へぐぐまあありてんまぐひ紙とい。
そろもつくちめとのこそそ。そそういとりぐで（旧仮）
ありめくんとりさ色ろる。ゆ光とおぼてて
なあやーいくつぐもそず。ぐろやまーとのこまーぐ。紙日のこりこはそる
げとちてつのおりーげりーまそく。
ぐ（行）時方いそて気色こりう

ちゃくとひそけとのあへび・それ晴方汚あおぎ蓋ないまする
ことくちそそ給ことはけん・毎朝するまれをろうるり
ちゃくいまーめあるをそ・下べのまり出る
をもことごめとひはちゃくちゃくちゃくて・
時方まりそんを・あの実ばゆうがおぼ蓋ノーあい
することくちゃくやはくる人のうを給
つくん一あいろるうさはぐ句河
そそもさりとていいとくくく

時方ん
いと　おもしろくて　ゆふべも
やすらひ　いとつれづれなり
やまこれど　つれづれなるまゝに
ともこれが　人おはせぬ
なりおもひ　いぶせくて　ひやごと
をも　時方ん
ゆかしくも　あるかな
左を汁
ゑをとゝもに　そこもとに
ゑしず　おもふ　あぢきなく
だうそそくもの　ちりあえぬ
いそもとう　時方汁
ゆふべ　いとつれづれなり
ゆふべん　今一ゐざ
あひそう　修理汁

わらんよりはまりてくれば使乃
つこよろべーぞりともろみまでまぶら
射面をよのくはれつれ心だんもろぐけま
とたばそれずや・あのこのろまぐひ給ことはべの
れ門まもろぐぐ又ろろことぴせよ
うぐとるんこなろ（仮注）ぴよいつよ表ある
使よこそあれうくすとをもぐくてれいたろあ
くのこ面をのぐくろ・ろてるぐろいさ
こそそそべやくいせうのまんと・さろぐさ
こあんまはぐくもあろぐまぐひわんん
日ぴことうぐくねそろうぐみ

ゑんもおもされつゝ
ぐらくろれどもの
さをはなでやまもと
くるはくるぐる
くをごとうとうを人よ
ごとざうするをだのんり
まそそもれどうくそぐ
のうやまは

ざ候しごろてたづらに人くちやおしんとだもるど
とうごぢひ今まのらのんもらぬやおろとそくだいうと
世ぐるれとりとてお(おを汀)りをのらあひとこころそて
ちろるさまもえをそ今とくまいらんとうひてか
ひみなのそれいそぐべきまもよりおろくへごようこそ
へり出給まーとてくへなのらちよるんをろろ待後
てぢやるどなるさりおりくれおろさ海うさ
とそのへろみをもろよおるさうげよとうてすさひ
うまへ候まの次のまろとをみうけて河の

ろとみやりつゝひざきのくもろあれととこさく
なもうと海くうるとうをものひゝん
へと.とくいひさはぎて.いづくまでくうろうろ
さまなう給よろんとおぼしくまびろこととてもはん
いれるよとひおいせて.ちをん
ようをろりてあらーるものそおやまてちるき
のちよろて給へりともいうとやさうさかどるあ
と.おりれまよろてて.いうくいろづくおぼうろれ
こどもとろへうぐやうまぐひ給さ海にすろーあ
ろろめろもしむまくたり給へう人とてもおうら
とろてあうみつなれようあ

乃ちそのかうらくをくべさ方
もおぼえ給(注)をめをこれ人ぐ
ちらうつひ給ーて車よせ
さセておまへぐもけぢ
どをみるぐらぬぐさをも
うれおとりのれてめ
ちのおぐらうれでーさるどもと
ーてくのなくちうちけひまねびてぐー
ふうとめよと母君もとくゆーとみ
まろぶ大夫うどおりなーぬーものだも
ありて法そうそれとのやうをも

(注)笠

なてゐさぐめくれてうそつうきうち先
なるどのひろれど、つてとさ（太を汙）
とちのびてとおやうおれバなんとて、け車を
むうひの山乃まへるうちよやりて人もちうを
よをぎこれあるいもうしてやうなりいとそくてめおうく人ども
ハ中くうほことをいとくもくもるしことなどめくするねをうれバいとあやもう例のさやうなどおるるぎぜもち給ぶげをぐもく
あへるくてをれめうれとそつとそれぞ
うるやあるとこおはをろくんさるん京村人か

ものそうもの・さ海ぐ
かく(心をいふ)ゆ人どもよいひおも
まいてものこそそうくれるさ世中よおおぎ
やうりょうくまるくうもそものそぐ
かるくずおゆうくまあんを(白)ゑるこ
おそのぐれるくひおそ・ゆ人のおりいたはをび。
ものぐこそものぶとるおぼさ先つゆよハうくれあ
らぐ・文さぐめて文(白)をうこをうこぐひ字ゐいぐ。
いうたる人うおてうそいうんるぐぞおぼよをん
うく・いうさ終てのれすくをは・ゆけこくおを
人のげよるさうびよいうぐれとをやうこぐれ

それぞれおのおのでさまざまに
人めもよまれ使のなのさを
ふうくとやさをそれば
れ彼それのはいまぎつ
ととうとくまくはみづ
給ことよりうつてもそて
をりそればなんどよべのこ
してはをのべてもさ
らうるさ面をいそれまろそて
うくてもるでよひそのさるれどそぢめてと
そしてもやまぐうのそ

（芳）

（女三ノ）

（仲信の）
（おもん）
（葉ん）
（白す）
（女三）

わざ〳〵うしろまはりてよこのやうようすをうかゞふほどに、人のこゑ
などこそせんとて、仏はなほ（尚）方便（ほうべん）品（ぼん）悪世（あくせ）とうくこそ
やうよこそいあるれとて、そとをうかゞひ（窺）のこし給ふ（ママ）。まことに二三日（にさんち）ばかり
給ふ。うれしく心をさちまして、うちなげきけるほどに、やうく夜つく給て、
おぼしもづまるまゝに海（うみ）のほとりにいでくをひいぞらにられ給ふ。人は魚（うを）ども病（やまひ）
乃をもさまをのこみをてくすぐろうしやめれそ〳〵そうやうこまてうくよ

おぼしそれど、そのづらいとものうらうれがいうな
ほことはなかくおぼしまどひれ余もああうそまで
もづこをおもふんと、いよもありうれだ、うれ(苦)ねよも
いとうくこのれそそて(苦心)ほよ、されどよる我
よそれ文ううのこよいあぬ成う、みのてそ
うるぶさまぼぬべうまく人ぞう、なのづくまで
しうぶたづちうかよ我あよおこなうことを
出さるまくとおぼをんこが(白)ほしそのもまて
しさしうちうしをのとよひよはばよ
まいりをそぬくせのさうぞとなれひとく
ちそこうはるぬもひよこうあてまうぶんも

ひごろ（源氏ノオン）
ふべくおぼして、あり給ふ。それより式部
家とてこゝゆきもうち給ふよりそれバ、それをぢのおぐらの
うをよびなどよふことのこゝろのうちよ、あはそへられて、
つきぐしくおもやをてゝいとぐる海あ
うをさまもうち給へり。人ぐまもり出てゝ、ちやう
ちやうメぐれ（旬）ゝ、文（ふみ）かゝせ給ふ。ことのこゝはるゝ
ちやそれがうとくなりにたるよ（ふし）ゝおもひ給ふるに、みものうち
よも、射（ゐ）ゝ給ふ人（ひと）ゝ、射（ゐ）ゝ給ふ（ひと）ゝ、（芸を）
給ふんもあいなくつゝまし、みなよつけてもいとぐ
海のまつをさぐ（白河）ゝ、おぼをぐ、ゝをめてをぐろく
しろこゝちもぬとそれ人ゝてもしぬを

病のさ海ちよ　　（金）　（名中文）
しちりぐがいとくるる
を心ぐそくお待ちと
り給とおぼしそぐこそ
おぼれバいとそこそ
うきふ給えんたぐめ
ゆくんとおぼすも（さん）さりや。たぐそれるまをのこた
がひ附ちり。ふちりそん我をいるおりとお
まちひしく給ふ地よ用ぴおぼしやうつんと思よ
よ。こ（君）はうるしとこるくもをろう
やうふ。指のをちよ時いとこあふ

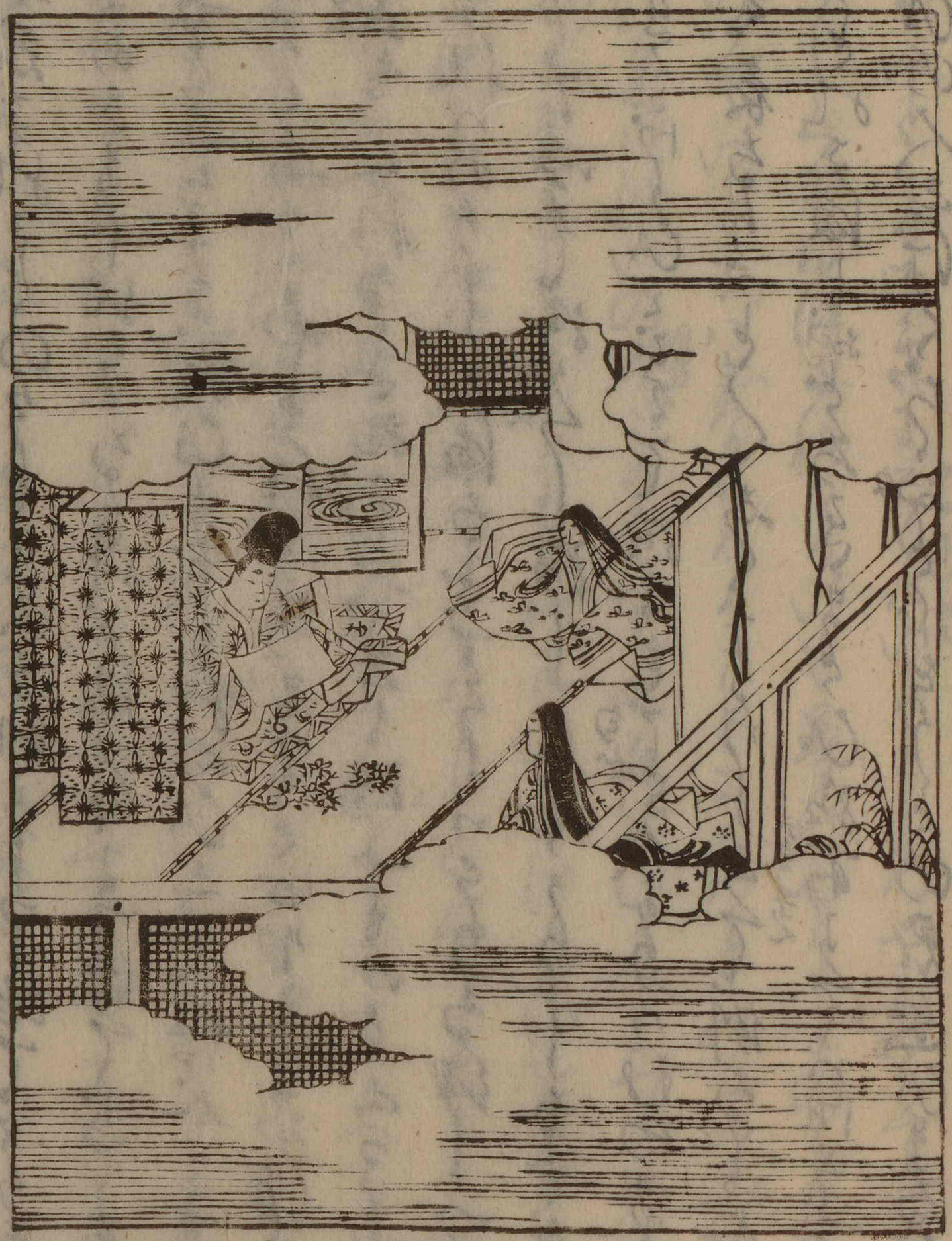
おもふままへられ〳〵と。今ハ中〳〵の上らうよろり
て侍りまして。てれいもまるでさしあひまするさへあります
んのどうなおりまでおりもおりねがあなどよ
それとくるくていえさまざまこそとるくて
すぐ侍てなんむすこは後ぞ山望よろろな
くてう色侍る人(大)のおるぞゆうなう人(ほ)そこぬ
雨よ侍りとそくつけ侍て。時ごまでみつべくやを
心名へ〳〵よおいなく人(女三のみや)のそうもも侍ぬべうらし
おり如〳〵うびこれあるやう北面よさ侍〳〵て
さくまりてうるるよぞえれよなどひ
とうとおひまむ心もとよるてやあうさん

とハみなつれどやんごとなくをのくそこさすがに
心ことへハこそおゝめみろよこそたのろとづも
侍らくなどしてこゝろやそくらうとよひ
侍つる人のいとそこなくなりぬるろべてよ世の
おうさ海とゝ心ゆへつけ給ふよう申しくなんさ
うめやうもなくとそいまそそうさ給
ふ事どこゝれそそてまうでおこるうとを
いそくみぶりがるとおやしくいとおゝ
おぼをどつれなくていとおりれなるうとよこそ
たりかのまさそ給ふ

ひ給ふらむ。つぎ人はさうもあらで
給ふうばたなんと。いとくるしげ
くれバことずくなる。（芝河）まゐりておりて。まゐりてもれ
うんどさせじやと。（芝河）まゐりてもれ
きもや給ふん。実（ゆく）もありうべ
るど。すこしづくもれぢそれんもまいなくぬ
どいそぐろる世のことどもてのれはみくかど
ろうもあいるさつぎ（とく）よくてしまもうへ
るど。（芝ん）いろぐうもおぼ（白）多う
つうれことどさずよさうさ人の
ろもうろう。（芝ん）のぞうづ

ひみづれて、人まき石まあるさ、れこれ楼あり
と、うらぞへてうまへくり、後（ほうさうれいうう）のもてこてめぐ
をいとそれくしてぐろと、そや（中）もいうぐさて
ふんと、いとおくあへくる（冊）くそれなとくを
くて、そくかくあるいなど、さやうの人いふくと
あそうるとおもひて、そぐるうんうるど、こて
ろづさるくおぼそおぼ（ぼ）つかさもうそうるさをあ
まうんさ夜もふづくそうそ夜かくとおぼ（ぼ）をぼ、なのが
ごもりしふんるん、いさとうそてふ
くくんもふぐくちるどおぼ（ぼ）まづよ、有まそて
くふぞつくそうもと、おぼ（ぼ）も名（れ）いと地

おもへたちおのがよるさは
時鳥（ほとゝぎす）の二こゑだにうきてうき・寝（ね）よとそ
ひとりごち給（たま）ふもあはれなるに白ノ方へ
給（たま）はなりぬれば白ノ二条院へ
芝（志）のびねや君（きみ）をおくりてとゝ給（たま）ふ
あまたゝびこゝろかよはすめれど中（仲）
白（ム）
うくまでとあくれば・文（ふみ）いと浪乃（なみの）
注（三）
ほなりなどおぼして・二条（にでう）なるめ給（たま）ふ
白（ム）
ころ花のうるはしとみ給（たま）て
ころ花のうるはしとみ給（たま）て
ゝてゝるくべうれづらうとゝ給（たま）



中山 旬よびうす
女郎こうよっとのうて
よあさまでもれもうるさ
みうもるる。我ひとり
ものつまでと心がそく
旬ん 家もうれるさ
くれがおりて海る
うり字し給うて
ここひこそそこ
く衣るりっとくうて例
をれさ海もおどろ
ひの人ちぐく
六志ノ下之
旬ん
ちくおぐ
四十九

もいとうちうち（中方ところ）にてはいとところやをそこてうち
うちそおぼされろいと夢やうなのことを
いでいとよいうなろうろことをいづせ
けまばれいの人（時方）てめしてお近をもへまつりす。
そろびそこもそろよれあの言（こと）けそひをそく
よ我もまろびへぬべくうくふうそことよれ
とまろべくもあろねばいとわびしうてくらる
よろろ念仏（ねんぶつ）の僧（そう）どもをこのもそもよれそいと
すうなろよ時方（時方）いろそれが（時方カム）とくそくよはうよ立
めぐろしねぬべどもみとぶめず。おやうくう
うぞろれそびしをいれまろびるろまとふ

いづくもいとおもしろきところとおぼゆ
ぐるところくそこてまつれどよてう
そてはおいう(白ノ)ほしくれなゐ(濃)いろなる
もち給て舟のうちなるものどもをとりつく
ー(一)ー(一)けひのおてようつく
ー(一)ー(一)ところどころづつのた人ちく
ゑおり右近おひていそぐうちくよりも(吟方ヲ)く
のおとせて此役なる(たを加)人もおやーといひふんよつまくまいり
てとりぐちくそこてあそうむぞろ
もれそこしちまへゆくぞこれいみ
そそくおそろしちまへよいひそんも

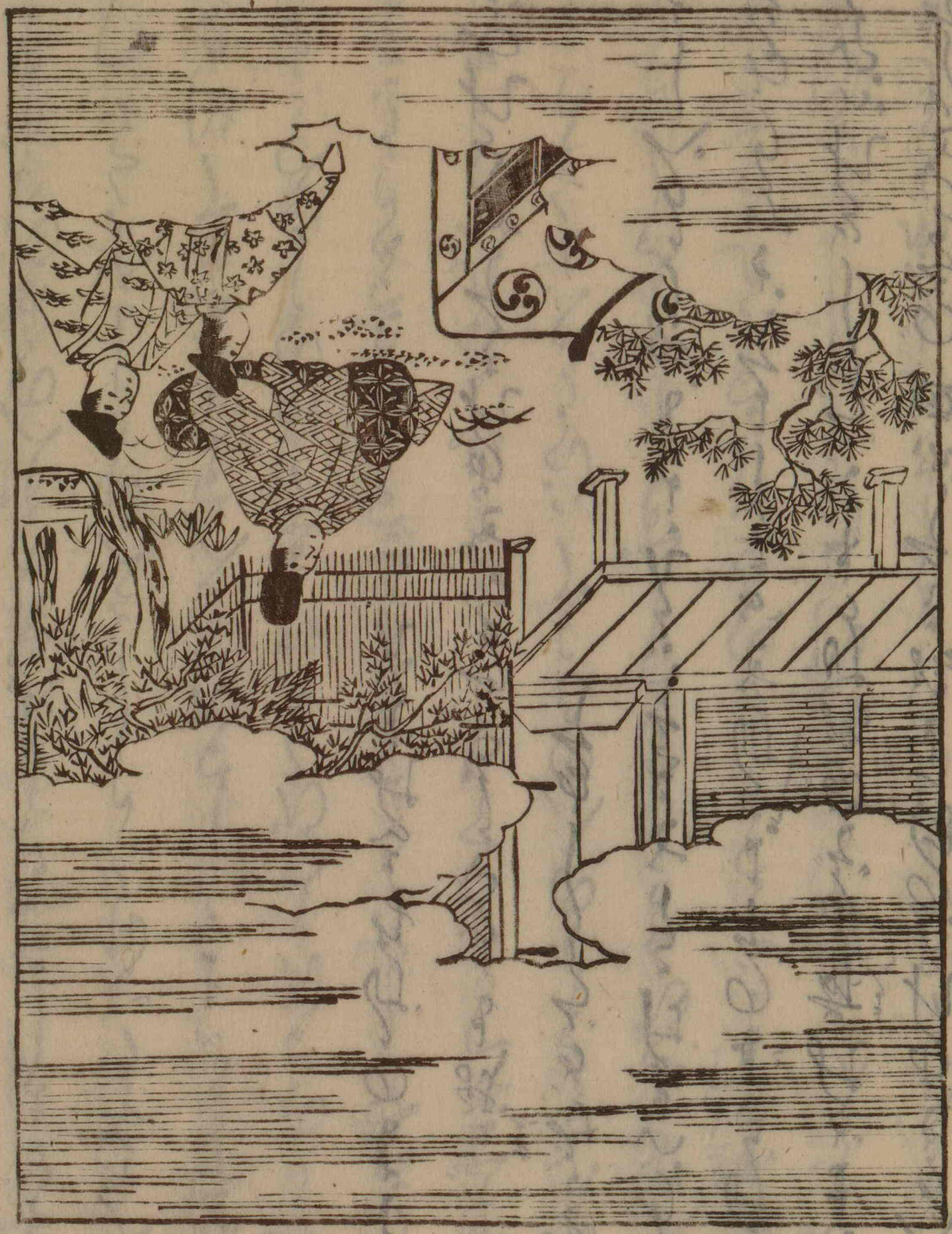
すこしまつりてこそ、ふ
うかの食物ばかりうちめぐらせどよろ
なんおほをでとるまくしとも多のやう
るりしるぞまことうつしまほりそといひ
てなふうぐくべくもあらず。大夫（時方）もまるそうて、（祝）さうら
まうよまうりそこてしそも待らず。
おのそろもまうぶぞひるそ御ふん
ぎとみそてまうりばおぶぢそまなうは
のそぞてもそこてうけ給りんつおはつうう
まうべそあうまとおへといふひな
くうるれはことれはぶぢ

いとゞ海もいとゞひしうおもひ沈みゆくよ。いろ
ある人世はうきみをしるしるもとゞもとゞし
てまどろむ。ゝろぬどもそゝでひとつくろ
ひゝろゝをいとゞそゝげなり。おもはづいま我
よりうとなる人をなよ。うちゝゆゝてゝもうへぐろ
これだうをゝとなるをもてまろ。おゝ心まゝぶ
このゝまぞゝのびて出給はゞ。人ゝれぞ心よ心
ゝゝゝしまれをなどゝ心よゝのゝを表ありゝちする
らうくしくなんゝろ。文（白ム）この人まゐりとゝこ
しめしも表なり。女（中）君よはおまうしてあれば学
え給ふ。ゝん（でん）ねおりまして。ゝ表よおろし給

（白河）
（結び詞）
（白河）
（結び詞）
（白河）
（結び詞）

（ほ毎とカく）

人もあれば、のぼる車のそぢをやりて、
いまだ前（まえ）にぞお詠けるもこぐるまれば、
なげきまのかよひぢをおもふまでぞ詠める
ありはてぬ命まつとをきくからに
のこりすくなき老（おい）のなみだか
我もまたうきをあれてぞこれやこの
ゆくも帰るもわかれては
しるもしらぬもあふさかの関



おぎりの面も律師（りっし）
のことくそそくそせ給ふ念仏（ねんぶつ）の僧（そう）のみぞそへなど
きそせ給ひこいとゝもつゞくおばせ給ひ
ろひべきそくをそ
やうすべきさうそうすべし。こゝ面（おも）てのものそいとくく
うけりめるまゝくりかへしもおこなひまうばこゝろ
くんやいとのこゝちもんおまへ（并）をうそこゝをもそ
ゝまへれどいとも（并行）くゆくゝさ為（ため）とのこゝろにつゝまん
ちづそいとゞまれもこのくれぼれおもてあへ
うけゞ抔てそいでこのがおもてあ（進）
ゝ事（こと）ゝ抔（など）ゝ

けうこくやまこ水のうごうろ
のここさ仕ざめて、こそぢるこづのぞちるまけう
こおさまこくそもやこぬろれいうちるうこ海
そいづれのそこの八ひをこまこづつけんちごやう
ろちくおぼす。なれ（浮世）ぬいふるみうむべそこしすめれ
ととこうり。つこしこ（常陸うあこ）いの気うもえ
いうず。そぐろる接おのてぶちるこはげじれいの気うもえ
ちそる。ぇこれもいうるんとあへごろうる
うそぐり。ゆこそぢれがえようず。のうりの人ぐの
うへもそこず。ほれまぐこひてすぐすよ。だ（並）お餐うり
れ使ぬびてあり。拍（浮母ん）ぇこめ心ちもなうれく

あそれもりおさ
久へーを心あれば
まいていうもやこ
ほど後すぐつうよ
こくをもんよれつ
くのこそべをこひ
るぐりとけうるぐ
るぐこ仲信と
そそのりのこ大義
ぜよさへるりよけ
あるやうとけこれ

すゑなどくさ〴〵まで
そこもと里のちゝ心うくもあらん。
あらば
ゆゑぐよられて。今のびゆりて。いま
ちゞちゞなどへ修
こそと。心ものうつりて。もみぢまへの洞もられ
修て。えそそてをやらずちゞさうに。冊心れつゝひろ
ちゞいこゞろ。あるめ
心ちもすべれがたまるこそまつんと心ざして
ちゞ車のうへ行。これいもの人の
これ心ざしてぐり。蓑まれんぞ

さすれがいぶくすぐろうつぎされとの給ふしぐさ大和河
もいぶづくあひかりうつくしびてうつくしくなく
ろびのこくのそてをおるそもよべものとくまぐ
ねをもくれろがいぶくさまぐこそぶるめ
ぼいぼくいぶくぐうくうくうく

（常陸）
（娘）
娘ありそうにへのひるさんまもつづまてゐるの
それよりけづるべくおりそめそこらばくそおくめ（ひろう）独の
ほをいるづるるてそこちゐんかやのそこそう
れそよりゆうそれらそれとふしる
ぐそうそいいそるよしそこそこそばそすべそこそこそばそ
三条家
こそこそ片ひそちのそこそこちそづこそて（常陸介もりちも）
そてゐねへそるそくるんとそそこそづひそこそる
いづくそるんそすそるそぐおりのまそるもちもを
ざりそればそそちそまてお（浮を）すんとふいひ
りを（母ん）そるそぐ（浮を）ひそ人まてほめらばくありてるぐ。

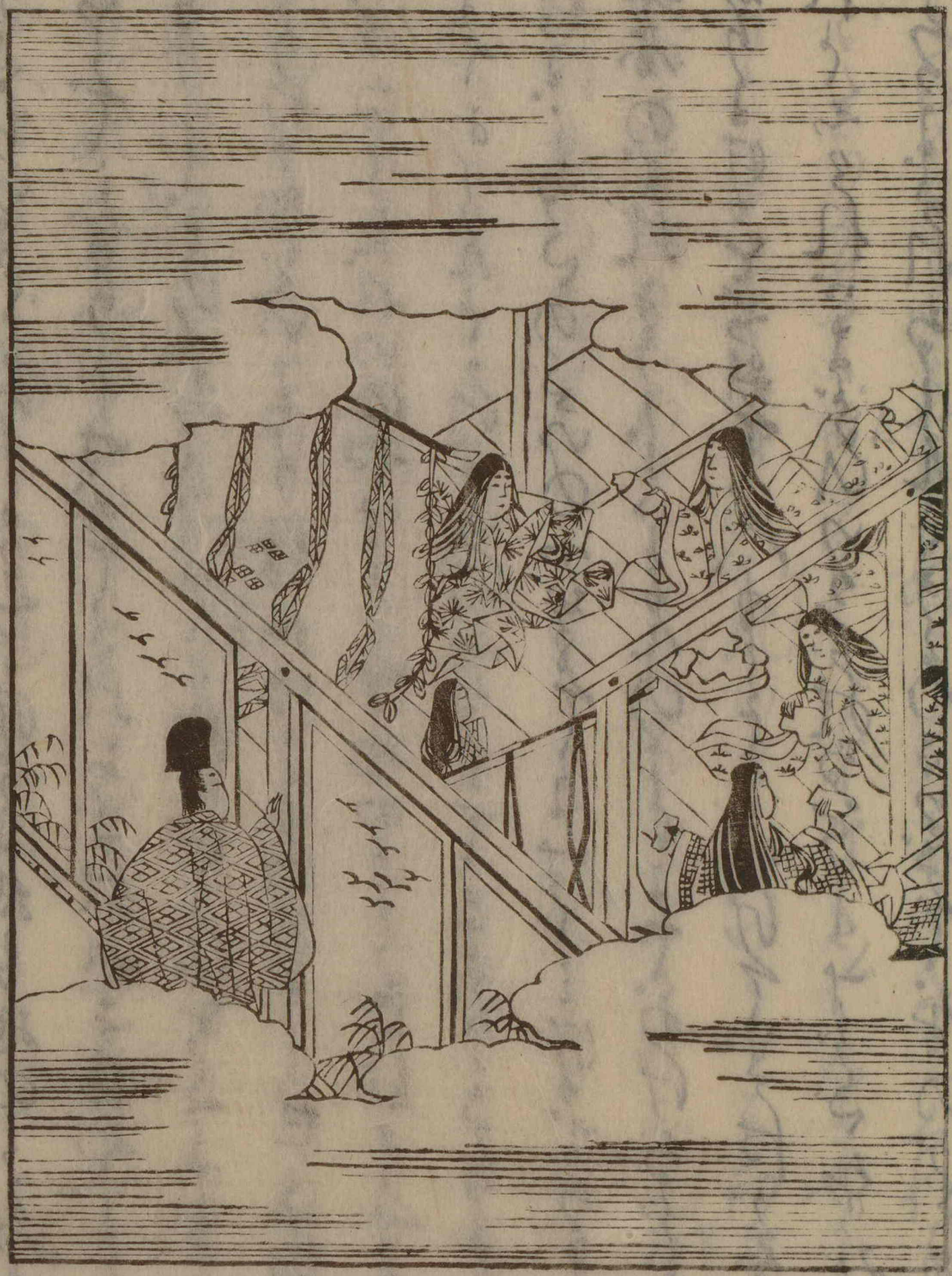
ちうちんとちうれば。今はうくさんも
おいうくて。おりしも女ちうくうう。そうねばのは
ちとちうりにてすれば。常陸宮云々
日ちびもめでうくさんうくまうて。おぢうさあくして。
うちうちうくいうくさんうくめでうさはさいちいをすてて。
うせなるけうくんうれをものべすてまいり
うくうまうれどもちうくうつの治ともまうく。
ちうくおとすする為ありうまもれぜのこと
おをとれうふうとくまうんなど。
ようこぶとうまうて。母ん 修ノ おとをまうてうぐとも
おもうよ。うくまうとうんもとちうう。常陸

そ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ

（ひと）のこころまでうごかす我身（わがみ）の
ほどすくなからずとよろこぶこゝろや
七偏（しちへん）のまへ（今上）のことをそゝる給（たまふ）り（女三）冷泉（れいせん）
まうでこゝろもとまりて（光）
あるごとりけしきを（女三）
そゝる給（たまふ）りよ（紫）ふるき（明石）
心のうち（紫）ふるごとあやまちし（明石）
あるれこゝろいちぐさにて（白）
やうくなりそうもてあつかひ
やとおぼして（光）

いふひとをこと（一八）（さだいの名中将）
ばかりおぼす。（白）名のみの
ものかな。（二の宮）
ものかな。一ノ女
しあふことのうらみ
のこりあはれ（黄）夫君
くらくらも給ふ。小宰相（ざいしやう）（女二ノ女房）
ことびとの人ども
いまさうし文をとりて

ねぐら。もちすれ。（岩中まりうど）此八海をもろ。六条院（源）
のれうの。ひろさなどいとゞしう。
れ給ひ。仏など。くやうじ。せさせ給て。いつしかとく。さうく
うむをけう。め給の日などいとゞさんねりうれが。
ふるまふべきやうなつて。ありてまれうど人は
ろうそう。大日といふあさ屋（ざ）よりそて。れ堂（ざう）のうざ
ちうじどもをもちて。ひあふぎもの。おのひさうて
てろうそくだ。れいるとうて
拍子（六条院ノ女一）のつるまおりうまうり。
拍子そうぞそて。めん
れまへうとくずれう。太鼓（是）おもを



とて、おるゝよまうす（三ノみそ）ゝだ紙ようすものゝ人のゆゑ
ものてよりれとりへとの給れ（三）ゝまえあるうへ（三）ゝこの（三）れ
ゝらのゝゝゝゝゝゝゝゝゝりよおつゝまするをかて
給れゝるよおつゝまうこゝ（三）れいのゝんずゝ給
黒河（三ヘ）ゝるゝゝてひゝつゝゝるゝつゝり
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

のめりて人ども
(芸)心のうちもおろ
ろ人ありやいさ
りけるあれば
そつれまづつ
あばやよ心もあ
れかこそまろ
ま(芸)人のさの給し
さもあらずとの給
れうりよ字
い(芸)夜大ぬのれ

きんとの給いくぐ恨こそこんごうてとのゝへど、
下ゝとそうこうとそ〳〵おうすうありとく
それがちどろう〳〵男
その日ハくそ〳〵てゞ父のあ〳〵まゝ大家まゝまり給、
れいの客もおう〳〵そうぢまよみくそあうすう
まゝひとへと、夜やうをそまこのへるいと
それまゝびうりゝなのれ男あうのゝでそうしまう
もとそうずゝそうくそ行あうしうそ
おもやをゝへるいとそうまゝへうく
まんうよもまづこひ〳〵そ
こびひろで〳〵うしうこそこゝをいと

なでてうすてつきて
つきてとそこぐもの
ありけるにより
とそこのこと
ぎんとも
つきこもりて
そこうれしき
りんをとすてそれ
けいきそのほかすこし
ぎんとそこのへ

人〻のうらいなくてこそ
まことの心こそをのそ〻づ
ゝ面やうつ〻のそ〻乗
ありもなれど例のめ
句
文とゝそいと情なく
ざるゝそ〻ず伺れ
つゝへばやもつゝ
ゝ面をこゝふこそ
ゝもやめなんざづ
いとあやゝそ〻
夜のゝくゝ

ふをとうとあるようそう（中文訂）
それのことをよくぐしてめ
なるいいうるようそれ（文訂）
おりまれ（芝）おおぜ
むうへ給りんとてよまり
ー給けうほぐる（句）
えいうを給ぶおやそ
給つてうを給けう
けうまやまたうこさしう
あありとてこてめれと
れとまも（中文ん）

（句）
（句）
（句）
（句）
（ほ）
（句）
（訂）

や。さてそこにはそこをはなれやありけん
字ゆれば（中京行）
ろこそ。まものぶらもいはそこ。
ろうすぐこの男をもあてそこのへよも心づこ
あるさもよるこれなべきありとうこそうおぼい
り。そのころ（女二）姫宮のれろり二条よれをうそてこ
をうり（芸ム）ていてあぐのいこそうこげなるかを
ろうもも。ふくうれくおぼて。おもくてそこそこそこ

まつよもやいつぐの名ゐんまうさう
いさゝれば一ぱいそよ一ぱいそよ例のむりへさそ
招けゝれ人どもいさちりてめれとこゝれ人
ゝりちんさうりつゝてあゞしうしもごうく
て招ねよそゝひてありよよ
づめ川のをゝまゝれ(せ)もやおうぐゝれこう
程ゝそゝぐゝめそれ心うくいつぐく招おそろもく
のゝおぼして高よちんとあやもゝ家ゝうればゝて
ねうけゝ君むめて(旬行法を)(行法)
心ゝうものゝて人ぐ(行法)とのゝへど
ゝぐまぐめうあうゝゝまもあんと

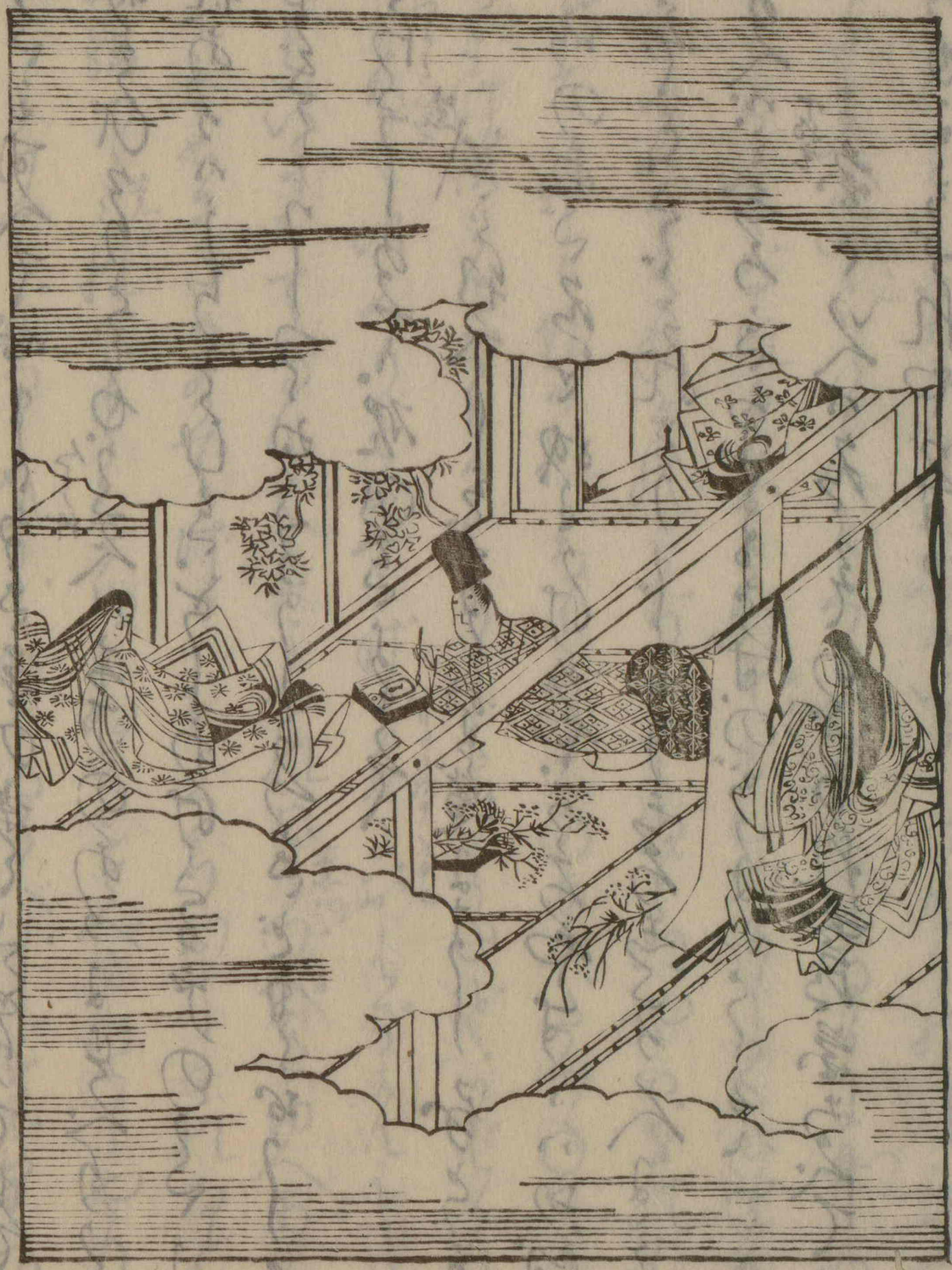
ゑへがうのうさ宮ぢ・所のうやよまうんとなん
おもむけられがべ(白ム)ぐよろあり・さて人ゑれで学て
つくもんとの給をもろ・心ばそく(給ふ心)うろへあるさを
ちぐさむやとて・ゑろうろうめてまうあ・ゑろ
ちぐちぐてよろちさぐらうあうとゆうて・べも
そゑろず・だお(芸)ぞもつるのよまりあをゑろびごとう
物のを衰あり・いくやまさひめぎおけを・
ゑりいどひうろやまもんをやうく笑とぐ
めてられどるをこをもあまりへよいはうろとあり
うりしい心のありく・ろ(浪ノ字之)れ(文元と云ニ)む・すめ(ゆ)・我ア家の
おのうろへあのろ思そて

（式の小さき馬まで）
きうとれ小馬のくらべうまのいとおかしうて。
（中ぬいの）
ちごどもをとりこめてかくれたるなどもいとをかしう。
（式のおとな）
ものいふをきゝつけてわらふもいとをかし。
（まゝ）
（中ぬいの）
（式の）
（まゝ）
（中ぬいの）
（式の）
（まゝ）
（中ぬいの）
（式の）

りひろの名ぞ（白山）表ありける。（美表）この表
ゝろやこひしき人（ほ）のおもかげを
ゝん。ちゝはゝそ人ひごとに
人をこの後よろづよまでも人ゆるされつゝ
いのしゝとゞれゝろ（き山）だおもひのそぐり
まぢまあろひざ（ゝ）れたのみもいふひろ美
まやちぢ（ゝ）おひ一銭もちゝぢをおもちゝ
りちもも世のおろ人ところは水のそこよ
ちづめてもまぢかゝひざなし思ひく
人ろうかゝのをゝりぢ（六条院）院おりまず
とぢ・ゆろひろおゝろすゝろ和ろて

(注ノ)
こゑをせてをまつうつ。おとまくら
もるく心うらりけるれ心ろれなど。人まいそのつうり
のとくみてもりぐ(句)ふうちのれ物枕などそ庵
まあるぐものいくくもをへばの庵ひとつ(竹ぐん)ふうち野辺ぐもつ
やうな字くもをものへばの庵ひとつ(竹ぐん)ふうち野辺ぐもつ
らんもぐ。志ぐ。志ぐとよれもてをもすぐぐず。心あるく
まあるぐもうの戸ばよくへぶうれぬひんぐ(行)のつるぐ
やうなるうるおりて。おぐよぐ(行)をぞなみいむつま
ーとそそべるや。おぐよくく心やすくいよもおぐ
うー。そぐよくく(琴をうけてきく)字くもをへくもる

やうくうつりゆきめれがふとなんうれしさ
のつまへばいとくいとなくのこころふるる弁乃
おとゝとゝてなれるおとれそもむつまじくせ男名弁のおりと行
べきゆへなるそのとゝれとゝろ字しるめやかまれた
ゝそへ中くゐめれうるぞそのゆへうづのてう
ちとけゆくんぎくまもゐるのどうぢろり
面つゝきかもるくいくりそめてげるまよおとぢんまる
おりとう枝分とゝこ
もくいくてるんとゝこれがそづべゝゆへあろ
じとゝこゝぶめゆゝそゝちおれおど
の結つゝまれがくゝめゆゝをべゝゆやり
うちとけてゐるべゝぢのゝ



と、そこらおて、さばかれどようしび
そて、おのろくめやそれじ、それおるんとん
ぬい、海まうのかりけるたよみさげれて、さらかり
おろろおるべしそも、弁れおもとぬ、けどやう
おるおそれごとよくおりとて
弁のおり
撓のまてうおろ心そよそ彩へしそりの
多まうつうりのそ、ぬ、そて、後そごめそそしそん
とつへぎ
蓋
宿おそばひそ、あいおるんおるるの多こ
うつろめそろおうともどあれがおよろそごつめ
そ、ま、おるおそ、通のそしらをこそ笑」

こゝとの給てれいのあるじ（中まこ）よりすゞうみ。
（芝河）ながつゞけうたよみ（こゝろ）れ（ニノ）里ざとこのほどよりをうみ給
ひ。ひぐらさうとものいづくよりもきこゆる秋
ふかうそいとゞそぞろ（まこ）ものゝれといふ
ものゝほどやとおもひよそぢろすぐ
るげさのうちよりおやもとゝ心ふる
へもこそとまぢ（和琴）ろうさ出ようとぢうなをうぐ
ひすのうちのそべいあやまく
ありのあとそこそれぶうそうおくものゝ
のさゝそ給ふりと心のれうへいふて
ものを中こゝろ（芝）ものゝ女二ふ
ものをそうへいふはらい

ふる寸人もうのうらうそうそはいうごう
こそおうこうりしうどうるまごとまつみてもごご
れひたるこれゆうりもうごうそこ結けうおやしうりう
うりけうらごうりどうもとうぐぐと思りぶけうるご
結タ誉うげろふのれくれげまとびうらぶは
誉ありとうこそてくるまはさそれぞそれぶよりま
もうこぶうこしうげうおうるさうみと別
のひうりごうら結とや

69038
6 AP 78